

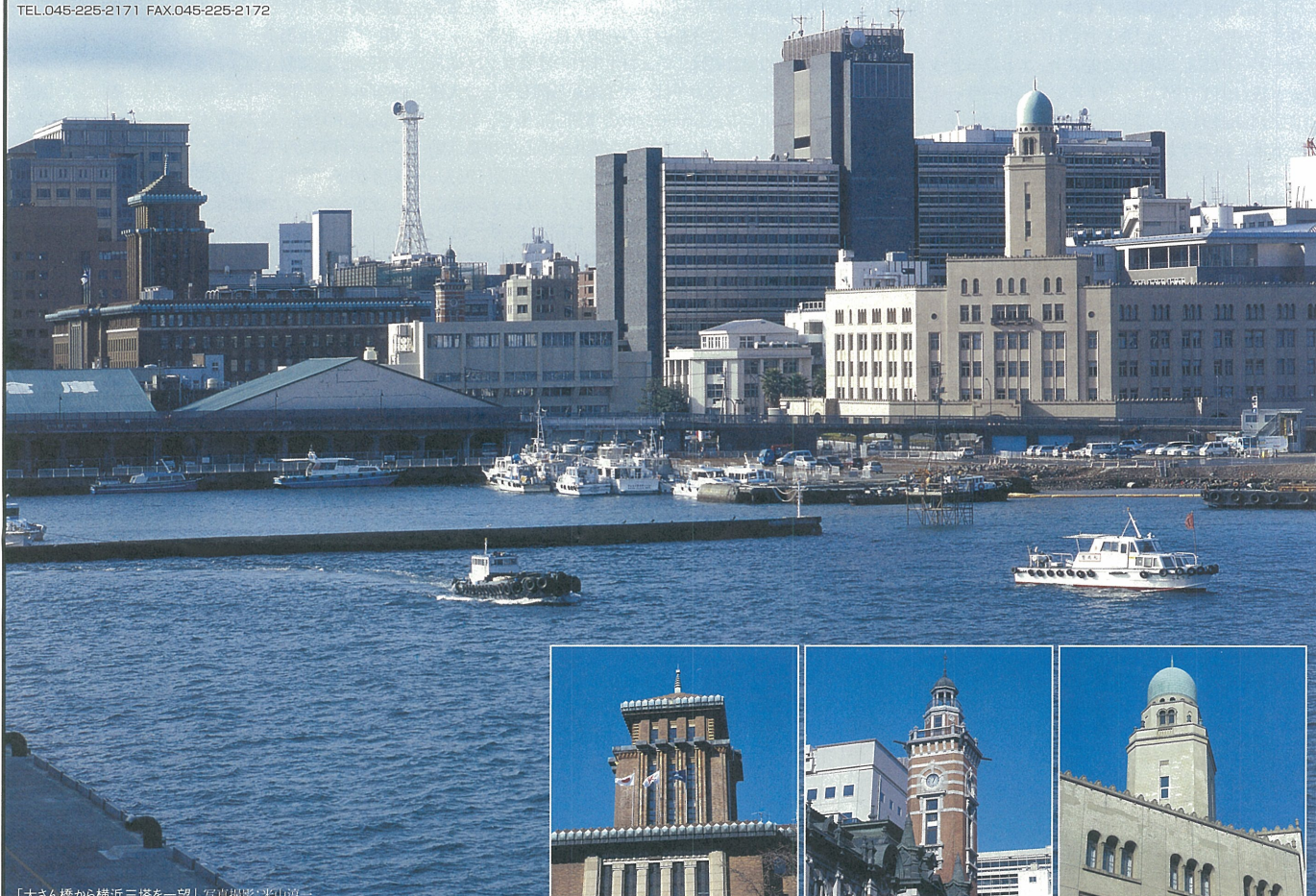
歴史を生かしたまちづくり

# 横浜新聞

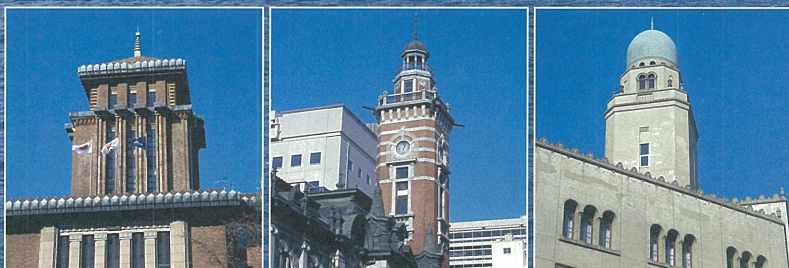
## 第21号

平成19(2007)年3月1日発行

企画編集・発行：横浜市・横浜市歴史資産調査会  
 事務局：財団法人はまぎん産業文化振興財団内  
 〒220-8611 横浜市西区みなとみらい3-1-1  
 TEL.045-225-2171 FAX.045-225-2172



「大さん橋から横浜三塔を一望」 写真撮影：米山淳一



左から「キング(神奈川県庁本庁舎)の塔」「ジャック(横浜市開港記念会館)の塔」「クイーン(横浜税関本関庁舎)の塔」 写真撮影：米山淳一

# 横浜三塔物語

吉田鋼市 (横浜国立大学大学院教授・横浜市歴史資産調査会調査委員)

キング・クイーン・ジャックの各愛称をもつ横浜の三塔は昔から名高いが、近頃「横浜三塔物語」という言葉がよく聞かれるようになった。三塔を同時に見られるスポット3カ所を全部まわると願い事がかなうという「物語」が、付加されたのである。いわゆる都市伝説の一種だが、都市伝説にはおどろおどろしいものが多いのに対して、この「物語」は、ローマのトレヴィの泉における、肩越しにコインを1枚投げれば、もう1度ローマに来ることができるという伝説に似て、ほのぼのとして楽しい。ついでながら、トレヴィの泉の伝説は、2枚投げると恋愛成就というのが後に加わり、さらに3枚投げると離婚可能という少しブラックな話も加えられているらしい。

三塔のデータを復習しておく、キングは国登録文化財の神奈川県庁本庁舎。設計は小尾嘉郎のコンペ当選案をもとに県庁舎建築事務所(実質的な中心は渡辺

利雄と池辺宗薫)が行い、施工は大林組で、昭和3年の竣工。クイーンは市認定歴史的建造物の横浜税関本関庁舎。設計は大蔵省管轄管財局工務部工務課第二製図掛(掛長は下元連)、施工は戸田組で、昭和9年の竣工。ジャックは国指定重要文化財の横浜市開港記念会館。設計は福田重義のコンペ当選案をもとに市の開港記念会館建築事務所(主任技師は山田七五郎)が行い、施工は清水組で、大正6年の竣工。キングが県、クイーンが国、ジャックが市の施設。古さはジャック、キング、クイーンの順で、ジャックだけが震災前から、主たる構造からいうと、あと二つが鉄筋コンクリート造なのに対して、ジャックは煉瓦造。塔の意匠という点、キングは少し和風、クイーンはイスラム風、ジャックはクラシック。そして、塔の高さは高い順に、クイーン、キング、ジャックの順となる。

ところで、キング・クイーン・ジャックの名前は、

横浜港に寄港する外国の船員さんたちの命名だという。昭和27年11月28日発行の横浜税関職員の機関誌「かすとむす」に、ハマ名物の三塔、キング・クイーン・ジャック云々という記事が載っているのを税関職員の方に見せてもらったから、少なくともその頃には三塔伝説があった。また、昭和13年に横浜税関長だった方が、当時すでにクイーンの塔と呼ばれていたと語っておられるというから、おそらくこの伝説はさらに遡る。三塔が、震災復興なった都市横浜の象徴に見えたのであろう。この古きよき伝説に、およそ70年後、新たな伝説が付け加わったのである。「横浜三塔物語」も、トレヴィの泉の伝説のようにさらに増殖するかもしれない。物語は、まちを親しいものにする。よそよそしく見える都会が一気に身近になる。三塔をめぐる、多くの人々のそれぞれの物語がつむぎだされるとすばらしい。



# 本牧・山手の西洋館など 横浜市認定歴史的建造物を4件認定

—認定は77件に—

## 中世イギリス風の白亜の館 —本牧の旧バーナード邸 関和明(関東学院大学教授・横浜市歴史的資産調査会調査委員)

この白い住宅は、三溪園に近い本牧元町にひっそりと建っている。本牧一帯は、開港後、海に臨む立地が好まれて遊歩道が設けられ、山手に続いて外国人の居住地あるいは別荘地として開発されてゆくが、かつてはこのあたりまで海岸が迫っていたとおもわれる。

バーナード邸は、昭和12(1937)年、エドワード・V・バーナード氏(1911-1962)とリリアン・C・バーナード夫人(旧姓ヘルム 1914-)の新居として建てられた。E.V.バーナードは、1875年に来日し茶貿易で富を築いた英国人チャールズ・B.バーナード氏(1853-1947)と千代夫人との間に生まれ、横浜とイギリス・ケント州で教育を受け、シェル石油(旧ライジングサン社)に勤めた。ちなみ

に、父のC.B.バーナード氏は絵画にも造詣が深く、日本の初期の洋画家高橋由一や五姓田義松らに油絵の手ほどきをしたC.ワグマンと親交があり、彼自身、明治初期における横浜や神戸の居留地の風物を描いた。終生横浜を愛し、妻とともに今も山手の外国人墓地に眠る。

この建物の設計者は、チェコ生まれの建築家ヤン・J.スワガーである。スワガーは、大正末から同じチェコ人建築家のアントニン・レーモンドの事務所働き、レーモンドが離日する直前に独立して横浜を中心に建築活動を行った。代表作に、カトリック山手教会聖堂(1933)、先ごろ取り壊されたセント・ジョセフ・カレッジ講堂、関内本町通りの旧警友病院に隣接して建っていたヘルム

ハウス(現存せず)などがある。

バーナード邸は、外国人建築家が外国人建築主のために建てた住宅であり、建築主の趣味を十分に配慮した形跡がある。全体として、中世イギリス様式のモチーフが用いられ、正面ポーチコ(玄関柱廊)の軒廻りや両側面の妻面、庭園側立面など見られるハーフティンバー・スタイル(木軸部が外壁に露出する)、破風板の線型、窓建具の菱形井桁、煙突部の螺旋型、室内のポインテッド・アーチ(頂部が円弧ではなく屈曲する)、暖炉の装飾、階段手摺子の鉄細工などの細部意匠にまで一貫している。

玄関ポーチコ脇には半円筒形の吹き抜け階段室が設けられ、この部分のみ鉄筋コンクリート構造で、スチールサッシによる突き出し窓が螺旋状に取り付けられ、一部にステインド・ガラスが施されている。屋根は印象的な円錐形の尖り屋根である。

内部に目を転じると、1階リビングルームの暖炉がある壁面のタイル、中世風の木製パネルで覆われた書斎とダイニングルームにも興味深いデザインが見られる。

この建物は、横浜には緑が深い建築家スワガーによる唯一の住宅作品であるだけでなく、建築主、立地、規模、建物周囲の庭園の緑、そして保存状態などを含めて、歴史的建造物としての価値は高い。



旧バーナード邸

写真撮影:安川千秋



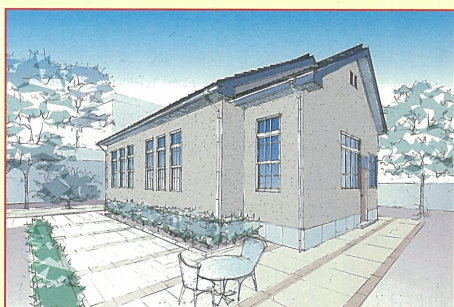
旧バーナード邸(玄関)

写真撮影:安川千秋

## 山手89-8番館

[西洋館:中区山手町]

震災復興時に横浜市が外国人用住宅として建てた市営住宅29棟のうちの1棟である。切妻屋根をもつ平屋建の小規模な西洋館で、質素な外観だが、関東大震災後の山手の典型的なスタイルのひとつと言える。

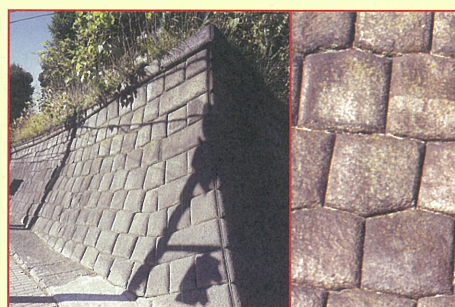


山手89-8番館(復元工事完成予想バース)

## 野毛山住宅亀甲積擁壁

旧平沼専蔵別邸石積擁壁及び煉瓦塀  
[土木産業遺構:西区老松町]

野毛山の一面にあるこの場所が、明治期に生糸、米穀物商で成功した横浜商人の平沼専蔵の邸宅地であったことを物語る貴重な物証である。石積方法は、亀甲積といわれ、原石の表面を六角形に加工し、亀の甲羅のような形に積み上げている。高い施工精度と構造的な特徴も含めると、横浜屈指の芸術的な擁壁と言える。



野毛山住宅亀甲積擁壁 写真撮影:安川千秋

独特の表情を見せる亀甲積の擁壁

## 二代目横浜駅基礎等遺構

第二代横浜駅駅舎基礎遺構及び  
横浜共同電燈会社裏高島発電所遺構  
[土木産業遺構:西区高島2丁目]

平成15年6月、マンション建設中発見された遺構である。大正4(1915)年に竣工した二代目横浜駅(1915-1928)の赤レンガ積みの基礎部分と、わが国最初の発電・配電事業者である横浜共同電燈株式会社の発電所「第二海水引入口」の水槽部分と導管部分の交差する部分が残されている。現在、建設中のマンション外構に一部が保全され公開される予定。



二代目横浜駅基礎等遺構



# 旧露亜銀行横浜支店及び旧伊藤博文金沢別邸が市指定有形文化財に

## 旧露亜銀行横浜支店 吉田綱市 (横浜国立大学大学院教授・横浜市歴史的資産調査会調査委員)

竣工は、大正10(1921)年。震災前の建物であることは広く知られていたが、堀勇良氏が発見された大正10年1月12日付けの『東京日日横濱横須賀附録』紙上の「露亜銀行の支店新築」という記事によって建設年がわかった。施工は不詳だが、設計はリヴァプール出身のイギリスの建築家で1907年から1921年まで横浜で仕事をしたバーナード・M・ウオード Bernard Michael Ward(1875-1957)。彼が1925年3月に英国王立建築家協会に提出した正会員申請書の業績欄に「1921 Russo Asiatic Bank Building Yokohama」とあることが坂本勝比古氏の調査でわかった。

露亜銀行は、ロシア資本の露清銀行とフランス資本のバンク・デュ・ノールが1910年に合併してできた銀行。そして1921年ごろの横浜支店長はイギリス人だったから、いかにも国際的。しかし、露亜銀行として用いられた期間は短く、その後、確認はないがドイツ領事館として使われたと伝えられている。戦後は長期間の接収を受け、昭和34年から53年まで法務省横浜入国管理事務所として、そしてそれ以降平成8年まで警友病院別館として用いられていた。

意匠はほぼ古典主義の様式建築であるが、鉄筋コンクリート造であるから、最初期の鉄筋コンクリート造の様式建築の例でもある。ただし、壁は煉瓦造という半ばは混構造であり、また米国産のカーン式異形鉄筋を用いた床スラブがある技術史的にも貴重な存在。なによりも、かつて横浜にいくつもあった外国資本の銀行建築の唯一の遺構である。



旧露亜銀行横浜支店

## 旧伊藤博文金沢別邸

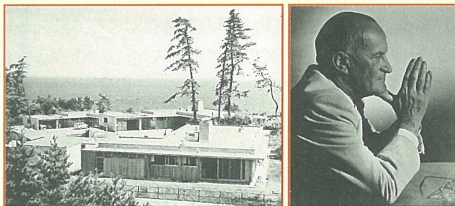
金沢区野島の東岸、東京湾を望む海浜に、伊藤博文が明治30年から31年にかけて建設した別邸が、平成18年11月に市有形文化財に指定された。金沢がかつて東京近郊の別荘地であったことを物語る貴重な遺構であり、屋根を茅葺寄棟とする明治期の海浜別邸の様相を良く伝えている。

現在は、解体修復中で、平成21年度から公開の予定。



旧伊藤博文金沢別邸

## 日本牧スタンダード石油社宅などが取り壊し



日本牧スタンダード石油社宅

在りし日のA.レーモンド

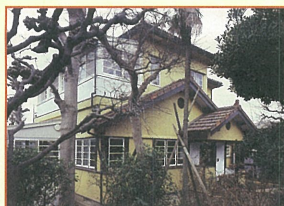
平成18年7月に日本牧スタンダード石油社宅(中区本牧元町、昭和25(1950)年竣工)が取り壊された(横浜市の調査により記録保存)。日本のモダニズム建築に多大な影響を与えた建築家、アントニン・レーモンドが第2次世界大戦後に日本で活動を再開した初期の設計のもので、外壁を柱筋からずらす“芯外し”を鉄筋コンクリート構造に採用するなど、モダニズムと日本の伝統建築を融合させたレーモンドらしい斬新なデザインであった。レーモンドは日本牧スタンダード石油社宅以外にも横浜に作品を残したが、それらの多くは既に取り壊され、現存する建築は戦前から戦後にかけての日本のモダニズム建築を知る上で貴重なものとなっている。(山手地区にエリスマン邸、フェリス女学院大学10号館などが現存)

また、10月にはJR根岸線の手車からのお馴染みの風景であった神奈川都市交通ビル(西区桜木町、昭和4(1929)年竣工)が取り壊された(横浜市の調査により記録保存)。

毎日何気なく眺めている歴史的建造物が取り壊されるのは、とても寂しく、残念である。 写真提供：(株)レーモンド設計事務所

## 港北区日吉本町の西洋館「中澤高枝邸」改修工事

改修にあたっては、外観改修は、外壁・屋根など全面的に改修し、一部については古い写真等を基に、創建当時の意匠に近づけた。また、所有者の強い要望もあり内部についてもできる限り創建時の意匠を残しながら、ジャッキアップによる歪みの補正や耐震補強などによる長寿命化も図る計画とした。屋根の



中澤高枝邸(改修後)

写真撮影:安川千秋

セメント瓦は、改修前のものを所有者、ボランティア、設計者が集まり洗ったものを再利用した。

工事は新たな発見に伴う設計変更の連続と、所有者が住みながらの工事という難しい条件が重なったが、改修前よりも磨きのかかった美しい姿に蘇った。 設計：越智英夫建築設計事務所 施工：有限会社社寺建築工務所

## 「本町ビル45(シゴカイ)」オープン



本町ビル45(シゴカイ)内部

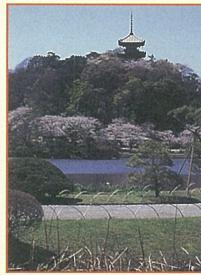
平成18年11月18日、地下鉄みなとみらい線馬車道駅前の本町ビル(旧帝国火災ビル、昭和4(1929)年竣工)内に、クリエイターの創造拠点「本町ビル45(シゴカイ)」がオープンした。

ビルの4、5階に建築・デザイン関係のクリエイター11組が入居し、制作活動を行う拠点とするもの。入居にあたっては、廊下などの共用部分は入居者が共同で色を塗るなどして改装、個々の部屋は各入居者が自由に改装し、それぞれの個性が生かされたオフィスを作り上げた。入居者の一人、櫻井計画工務の櫻井氏はこう語る。「建物の古さは魅力。また、クリエイターが集まることで、お互いが刺激しあい、新たな展開が生まれるとよいと思う」

## 「三溪園」が国の名勝に! 「山下公園」ほか2件が国の名勝地に!

「三溪園」が国の名勝に指定、「山下公園」・「日本大通り」・「横浜公園」が国の登録記念物(名勝地)に登録された。今回の指定

により、本市域に所在する国指定名勝は山手公園と合わせて2件になる。



三溪園外苑

### 【国指定名勝】

#### 三溪園(中区本牧三之谷)

明治39(1906)年、近代横浜の実業家原富太郎(三溪)が造営した広大な自然主義風景式庭園。臨春閣など国重要文化財10件、鶴翔閣など市指定有形文化財3件を含む建物が園内にある。

### 【国登録記念物(名勝地)】

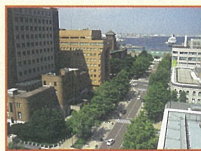
#### 山下公園(中区山下町)



山下公園

昭和5(1930)年、関東大震災後の復興事業として、横浜港に臨んで開設された日本最初の臨海都市公園。

#### 日本大通り(中区日本大通)



日本大通り

明治初期に、外国人居留地と日本人街を隔てる防火道路として完成した横浜の並木街路。横浜公園とともに、開港場横浜内の都市計画の基軸となった街路で、マカダム舗装と陶管の下水道を組み合わせた道路工法を用いた日本最初の街路。

(註)マカダム舗装：砕いた石を突き固めて堅固な路面を作る舗装技術

#### 横浜公園(中区横浜公園)



横浜公園

明治9(1876)年に開園した横浜の都市公園。日本大通りとともに居留地整備の一つとして、行われたもので、現在の園内地区の原型ともいえる近代都市計画の始まり的な性格をもつ。



# 西洋館でティータイム・ランチタイム・パブタイム

## 関内編

鈴木智恵子  
(エッセイスト)

西洋館で優雅なティータイムを。

そんな憧れの世界を、横浜では誰でも簡単に味わうことができる。あまり知られていないが、関内と山手に散らばる西洋館(歴史的建造物)では、お茶を飲んだり食事をしたり、お酒を飲むことができる場所がたくさんある。文化財の保存・再生から生きた活用へ。お茶の香り漂う西洋館のゆったりとした時の流れに身を浸し、しばしリフレッシュ。都市の時空に遊ぶ街歩きの間合の休息所が西洋館とは、横浜ならではの贅沢だ。一番格安で優雅なティータイムを過ごすなら、馬車道の神奈川県立歴史博物館(MAP①)へ。

青いドームの明治建築はかつての日本の表玄関横浜を象徴する旧横浜正金銀行本店の建物である。隣り合う日本興亜馬車道ビル(旧川崎銀行横浜支店)(MAP②)と響き合い、絶妙なハーモニーを奏でる。石造りの街並みはまるでパリの一角のよう。

ミュージアムの馬車道側玄関のアーチをくぐり、石の階段を上って重厚な扉を開ければ、気分はすっかり横浜レディー。ここの「喫茶ともしび」は馬車道散歩の途中に立ち寄るわたしのお気に入りのカフェだ。古い窓の鉄のサッシがレトロな趣で、昭和初期の貴重なガラスに隣の西洋館がよく映える。

定番は十番館のパンをつかったサンドイッチにコーヒーと、奥相模産の地粉で焼いたりんごパイ。丁寧に温められたパイは横浜伝統のホームメイドの素朴な味わい。どのメニューも値段の安さに驚く。ミュージアム・ショップやライブラリー、トイレもあるこのゾーンは見学者でなくても自由に出入りできるフリーゾーン。図書館を覗き、ショップであれこれ品定めをしているとつい長居してしまう。

国の重要文化財で十分くつろいだ後はみなとみらい線の馬車道駅近くの万国橋通りへ。人目を引く赤レンガの横浜第2合同庁舎(MAP③)は旧生糸検査所の復元。かつてキエンの愛称で親しまれた建物を低層部に復元し、背後に高層ビルを配した。外壁の生糸に因んだモチーフの装飾に貿易港横浜の歴史を偲んだ後は、1階のクラシカルレストラン「コンドール」でランチタイムを。一般の人々も利用できる店内は落ち着いた雰囲気、やや高級感のあるメニューもリーズナブルだ。1階には他に気軽に入れる喫茶店もある。役所の建物は、

ウィークエンドと休日はクローズなので気をつけよう。

本町4丁目交差点は過去と現在が交錯するところ。馬車道を眺めれば、粗い石壁が印象的な旧富士銀行横浜支店(MAP④)の建物と緑のアーチが出迎えてくれる。夕暮れに点るガス灯は仄かに明治という時代



BankART 1929 YOKOHAMA (旧横浜銀行本店) 日本興亜馬車道ビル (旧川崎銀行横浜支店) 神奈川県立歴史博物館 (旧横浜正金銀行本店)

も照らし出す。北仲地区の横浜第2合同庁舎と本町のBankART 1929 Yokohama(MAP⑤)、二つの西洋館の間からはみなとみらいの超高層ビル群が見渡せる。

BankARTとは歴史的建造物を拠点にしたアートによる街づくりのこと。銀行建築を利用したことから造語された。今は扉に「東京藝術大学」の額がかかる旧富士銀行の建物も2004年末までは「BankART1929馬車道」として使われた。

白いバルコニーが空中に舞うかのようなBankARTの建物は旧横浜銀行本店別館の移築・復元。高層棟のアイランドタワーとつながって、過去と現在が会い、未来への対話が進む。ホールの一隅にカフェがある。コーヒーで一服しつつ、イベントを楽しみ、横浜の最新のアート情報を得よう。シャンデリアが煌めく白い漆喰の天井の下でいただくコーヒーの味は格別だ。アートと食のコラボレーションもいろいろ。食卓や椅子、テーブルクロスに作品を用いたレストランのイベントからは横浜発の斬新な一皿が生まれる。

一日の終わりのパブタイムは横浜赤レンガ倉庫(MAP⑥)でスタイリッシュに決めたい。

赤レンガ倉庫は昼と夜とではまったく別の顔を見せる。陽射しを浴びて赤レンガパークの散歩途中に立ち寄る赤レンガも好きだけど、ハマの夜の間に浮かび上がるシックな赤レンガがとてもいい。昼から夜へと変身し始める薄暮のころ、一刻一刻を抱き締めて、ただひたすらに夜の赤レンガの誕生を待とう。

大人の時間が流れる赤レンガにお酒はよく似合う。バーで静かな時を過ごすもよし、レストランでディナーと酒落込むもよし。ライブハウスで音楽に酔いしれながら飲むもよし。あれこれあって迷うところだが、初心者には赤レンガの建物の魅力を満喫できる2号館のビアホール「BEER NEXT(ビアナキスト)」がお勧め。

倉庫ならではの高い天井に、創建当時そのままの巨大なレンガ壁。横浜赤レンガの直営店らしい力強いメッセージを全身に感じつつ、メニューを見れば、オリジナルカクテルにも赤レンガに因むものが、「明治44年」と「38MB」という風変わりなカクテル名だが、赤レンガ通にはピンと来るものがあるはず。

値段はお手頃だが、コンセプトは明治の煉瓦みたくに手堅い。ハマの夜は赤レンガ尽くして更けていく。

## 横浜三塔と都市デザイン

~常に横浜の都市デザインに君臨する三塔~



昭和50(1975)年に整備した都心プロムナード関内ルートの絵タイルにジャックの塔の絵と、三塔複合の絵が登場、昭和61(1986)年の最初のライトアップ実験は、三塔を含む12施設で実施、昭和63(1988)年の「歴史を生かしたまちづくり要綱」制定により三塔の現状保存がほぼ確定した。その後、ジャック、クィーンの保存改修が実施される。平成14(2002)年の日本大通り再整備事業の中で歩道に、平成18(2006)年には大棧橋屋上デッキと赤レンガパークに、三塔一望スポットプレートなどを設置。三塔前の歴史案内サイン設置は平成14(2002)年。検討中の関内地区景観ガイドラインでも三塔への眺望担保を重視している。(国吉直行・横浜市都市整備局上席調査役(都市デザイン室))



三塔をモチーフにした絵タイル

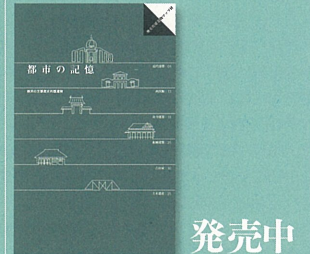


三塔一望スポットのプレート(日本大通り)



歴史案内サイン(開港記念会館)

## 横浜新聞(縮刷版) 都市の記憶(改訂第4版)



発売中

横浜市歴史的資産調査会では、平成元年から概ね年1回発行してきた「歴史を生かしたまちづくり横浜新聞」が昨年20号を迎えたのに際し、創刊号から第20号までを合本にした縮刷版(頒布価格1,000円)を発行した。主要な歴史的建造物の紹介のほか、取り壊された建物や再整備前の姿を納めた写真など、今では貴重な内容が盛りだくさんとなっている。

また、「都市の記憶—横浜の主要歴史的建造物—」(頒布価格600円)は平成16年度に引き続き改訂版を発行。今回は新たな歴史的建造物29件が加わった。いずれも、横浜市役所1階市民情報センター、有隣堂各店舗等にて販売中。